
フェチ性人格障害

かずん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェチ性人格障害

【Nコード】

N3485B

【作者名】

かずん。

【あらすじ】

誰でも潜む欲求。普通に生活し普通に生きてきたはずの男性や女性のふとした事からのフェチシズム。しかし精神科医坂田はフェチが人格障害であり、進行性の病であると確信する。その治療法はあった？

第1章 あきら

東京に来たのは3回目だった。

一度目は受験だった。

大学を7校ほど受験しそのどれれにも受からなかった。

結局、地元の私大に入り4年間を過ごした。

劣等感があつた。東京の大学にいつて生活を楽しみたかつた。
しかしそれがかなわぬ4年間だった。

就職の時期になり試験を受けた。

東京本社 of 会社も、地元の会社も。

結局、本社が東京にあるような大きな会社に受かることもできなかつた。

地方のスーパーにしか受からなかつた。

そのスーパーの中小企業家社員研修なるもので2度目の東京にいった。

大勢の中の一人で自由に歩き回ることもできなかった。

そのために二回目に来た感触はあまりに彼に残ってはなかつた。

毎日同じことの繰り返し。

朝、起きる。

ご飯を食べて、シャワーを浴びる。

徒歩20分の道を歩いてスーパーにいった。

おはよう、あきら。

先輩の佐藤さんはいつも朝早くに来ている。

10時開店のスーパーでどう考えても9時にいけばいい計算のはずだ。

それが8時50分に行っても佐藤さんは来ていた。

いつも聞こうと思ってても聞けないでいる
なんか重要なことに触れそうで。

あきらは普通の家庭で育っていたって普通の高校へ行き普通の大学を卒業した。

よく言えば中流家庭の普通の男性。

悪く言えばなんの特徴もない、なんのとりえもない男性だといえる。
22歳で大学も普通に卒業し普通の就職して1年あまり。

毎日同じ事を繰り返すことに何の疑問ももたず、なんの改革もせず
ひたすら今を生きた。

意識はせずに。

幸せとはなんなのかを自問自答することもあまりなかった
幸せとは自分を意識しない限り、不幸せ幸せを考えることもない。

ある意味それが一番幸せだろうと思う。

おはようございます。

10時開店と同時にお店は開く。

同時に数名のおばさんが入ってくる。

開店セールを狙ったおばさんだ。

今日はティッシュが5箱で198円のセールをやっていた。
しかも一人一個(5箱)限定

ねーにいちちゃん、二組だめ？
んゝ駄目です。子供さんでもつれていれば話は別だけど・・

いやー子はさ、車で寝かしてるんだ、ほら、駐車場の車の助手席見てよ

見ると助手席にベビーシートをつけて子供が寝ている。

苦笑しながらもうひとつ手渡した。

ありがとー。よかったわー物分りのいい店員さんでさ。

たまに思うこともある。

4年制の大学を出て、こんな店員さんなんて呼ばれることに対しての劣等感だ。

同じ年のやつはもっとすごい仕事とかしてるんだろうなーとか。

その度に、考えないようにした。

仕事なんてのはそんなもんだ。

あきらまもそんなにお酒を飲むほうでもなく、上司も店長も忘年会など決まった飲み会以外は
部下とコミュニケーションをとろうとはしなかった。

それはそれで心地よかった。

付き合ってお酒なんてあきらには嫌だった。

おまえ、彼女はいるのか？

佐藤さんにそう聞かれて、いえ・いないです。

こう答えたあきらだったが、もう学生時代から2年越しで付き合ってる彼女はいた

週に1度か二度、会うくらいのもので最近は会ってもそんなに目新しい会話があるわけではなかった。

最近どう？忙しい？彼女がそう聞いても

うーん・変わんないかな。

そう答えると黙って彼女は沈黙した。

彼女は身長も155センチくらいで短大を出てビデオレンタルのカウンターでバイトしていた。

あきらはその常連だった。

彼女が働くようになってからはアダルトは別のところで借りるようになったいた。

それが付き合うようにまでなるのはほんとに偶然のことだった。

たまたま勤めているスーパーに彼女が買物にきたときに、彼女のほうから

声をかけただけだった。

その日は特別用事もなかったのもそのまま夜、お茶する約束をしたそうしてそのまま付き合うことになった。

あきらにとってのはただの偶然の幸運だった。

いまのあきらにとってはそんなの彼女に会うことが嬉しいわけでもなかった。

いや、正確にいうと会うことにそんなに魅力を感じるわけではなかった。

理由はわからない。

彼自身にも他に好きな子ができたわけでもなく、理由がなかった。

第2章 弓子

弓子は22歳になるビデオ屋で働いている女性。

特に、おしゃれに関心があるわけでも頭がいいわけでもない。

取り立ててあまり目立つ存在ではなかった

子供のころからそうだった。

小学生のころに文化委員をやった以外に、学校の役員らしきものをやったことがない。

学級委員にも推薦されたこともなければ、特にクラブ活動でも目立つほうでもなかった。

2つ上のお姉ちゃんがやっていた切手の収集を自分も真似てやってみた。

たいした面白くもなかったが、お姉ちゃんがやっているのをやれば自分も面白いのかと思っていた。

面白いもなにもなく切手を集めていた。

集めるといえば弓子が楽しんだことに、5年生になったときに隣の席になった研司くんの落とす

フケを集めた。

もともとフケ症だった研司くんは机や床によくフケを落としていた。

それを休み時間などに集めて、家にあった風邪薬のはいつていた空のビンにいれた

ビンの底から3ミリくらいになったときに、それを見て興奮した。

自分の体にそれをふりかけて深夜に一人楽しんだこともあった。

高校生になって好きな男の子ができた。

今風のロン毛で茶髪の、クラスの男の子を好きになった。

彼はもとより誰にでももてた。

あまり学校には来なかったが、それがまたミステリアスでよかった。

弓子は彼が学校にいくと、いつも決まって学校に残った。

掃除当番の日だったら喜んだのだが、そうじゃない時も掃除当番を代わってあげたほどだった。

弓子の目的は、彼の髪の毛を捜すことだった。

彼の座った席の周辺に落ちている髪の毛を集め、それを教科書の中に挟み、大事に持って帰った。

決まってそんな時は弓子は自分の食事は自分で作るといって、卵焼きを作った。

それを部屋にもって行って一人で食べた。

家族は不思議がったが、それほど気にするようなことではなかった。

卵焼きには彼の髪の毛を刻んで入れた。

それをおいしそうに食べた。

弓子の楽しみは唯一それだった。

高校を卒業し弓子は家を出た。

姉は大学に進んだが、弓子には大学に行く意味もわからなかった。

親に一人暮らしをしたいと言うとあっさり、許可がでた。

それで家を出ることにした。

家を出てからはいくつかの正社員の口を捜そうと思ったがどこにも受からなかった。

近くのレンタルビデオ屋でバイト募集の貼紙をみて、そのまま面接を受けた。

そうしたらその日から人がいないので来てくれと言われて、そのまま働くことになった。

バイトをして数年たったある日、よくビデオ屋にくる青年と付き合いうことにした

たまに見るのだが、あまり返事もしない、暗い男性だった。

たまたま行ったスーパーに店員として働いている所を見つけた。

なんとなく声をかけてみた。

彼も顔を上げただけでしばらくは誰だかわからないようだった。

ようやくわかったのか、もう少しで仕事終わるからといわれた。

じゃ、外で待ってるから。

そう言ったはいいが、どうしようか悩んでいた。

別にどうってことない男の子なのだが、自分が待つ意味はどこにあるのだろう・・・

そうしてるうちに彼が出てきた。

その日のうちに付き合い合うことになった。

別に好きでも嫌いでもなかったが、そうしたほうがなんとなくいい

気がした。

今まで付き合っただということがなかったからだった。

第3章 あきら2

あきらの興味はもっぱら買物にくる客を観察することに限られた。

スーパーは駅から徒歩3分の立地のところにあり、周辺はマンションや住宅地になっている。

向かいにあるパチンコ屋の客もたまに来る。

決まってタバコやビールを買っていく。

学生もわりと多いのだが、最近の学生はスーパーで食材を買い求めるということが少なくなってきたようで3軒とりにあるコンビニに行くことが多いようだ。

あきら自身も仕事帰りにコンビニに行くことが多い。

スーパーよりなんとなく買物かごを持っても違和感がない。

なんとなくスーパーはおばさん臭いというイメージを持っていた。

いつも来る人にあきらはあだ名をひそか何人かにつけていた。

朝一でわりと来ることが多い、30歳そこそこの奥さんはいつもピンクの洋服を着ていた。

ピンク以外はもっていないんじゃないかと思うくらいにピンクの洋服を着ている。

しかもいつもピンクのワンピースかピンクのミニスカートだ。

下着も絶対にピンクだとあきらは思っていた。

もう一人が昼過ぎくらいにくる、おっぴろげ。

25歳くらいの女性なんだが、見た感じは水商売風。しかも、昼過ぎに起きたばかりとわかる顔つきをして林檎ジュースを買っていく。

このおっぴろげは実は雨の日にあきらの目の前で転んだのだ。

しかもミニスカートは全部めくれ、中の下着が見えるくらいだった。その下着が紐しかないくらいに面積が小さく、丸見えだったことからおっぴろげと彼は呼んでいた。

その光景が忘れられず、おっぴろげがスーパーの入り口横のトイレから出てきたのをみてすぐさまトイレにはいった。

女性用のトイレだが、外のドアにはすぐに清掃中の看板を出した。

4つほどある個室のどこにはいったのか確かめるために鼻を利かせたおっぴろげの coron とも香水ともわからない女性のにおいを嗅ぎ、入ったところを特定し

同じにおいのする個室を見つけた

その個室でにおいを5分くらい楽しんだ。

あきらはたまらずその便座を舐めた。

舌を出してゆっくりと・・・

そうすると股間が熱くなってたまらなかった。

第4章 精神科医 坂田

精神科医の坂田一は、その日の外来を終えて深いため息をついた。

ふうー。

ね、高木さん冷蔵庫に僕の飲みかけのお茶ってまだ入ってた？

はい・・・今見てみます。

ありがとうございます。でも、先生の外来って先週だったから先週からはいつてるんですか？

ん。そうだったと思う。いいんだ、それもってきてよ。

診療室内で、医療秘書の高木にそう話しかけた。

彼は一般大学を出てから精神科医になりたくって医学部に入学した。医者を目指したわけではない。

あくまで精神科医になりたかったただけなのだ。

解剖や生理学などはテストの点をクリアするためだけにしか勉強しなかった。

だからほとんど今は忘れてしまっている。

もう40歳を過ぎ、仕事をだんだんときつさを感じるようなそんな日々が続いていた。

なにも肉体労働ではないのだから肉体的なものではない。
精神的な疲労だった。

彼が十数年前に医学部を卒業したころ、精神科医の仕事というと、うつ病、躁鬱、精神分裂病（現統合失調症）それと各種神経症・そのくらいしかなかった。

それが今はかなり違ってきている。

一般大学の商学部には彼は卒業した。

そのときに、産業心理学をやったのが精神医学に進むきっかけになった。

もっと今の病態から変化していくのではないのだろうか・

産業心理学をやったのが社会病巣に深さ。

つまり戦後の人の心理の多様化だ。

多様化すると、それだけ多くの病態も出てくるだろう。

昔は一元化していた

簡単にいうと、お国のためという大義名分が国民を支配していた。

そのために、そこから外れる人は少なかった。

もちろん精神が病んでいた人はいただろう。

しかし多様化はここまでではなかったはずだ。

坂田は多様化する心理は多様化する、人格障害を生むと思っていた。

現実はどうなったのか。

予想どうりだった。

境界型人格障害、回避性人格障害、フェチシズム、反社会性人格障

害、解離性人格障害・・・
様々な病態が報告されている

その大部分が入院することもなく社会に放置されていることに坂田は苦悩していた。

社会生活になんの問題もなければ入院したり治療したりする必要はない。

しかし、人格障害は進行すると坂田は見ていた。
その時点で治療が必要になるのか。

坂田は精神医学会の論文をくまなく調べていたが、そのラインを誰も見定められない。

言えることは社会生活を営めるかどうか・・・この点だけなのである。

だから、SM嗜好のサディズムやマゾヒズムは放置されている
まれに、極端に成長したサゾが、殺人を犯す。

それを増大させるがごとく、夜の街にはSMクラブなるものが存在
しそこにはその嗜好が合う人が集まる。

そのうち成長していつてしまっ取り返しがつかなくなることを知らずに・・・

それが坂田の苦悩だった。

坂田が勤務する病院は政令指定都市の大きな市立病院だ。

その精神科を月曜と金曜を担当していた。

他にも月曜の担当医はいた。

3人ほど。

一人は症状にあわせて薬物を使用していくことを中心としている、浦田医長と、完全に中医学を使い、鍼と漢方薬を使って治療する渡辺先生と3人だ。

浦田医長と考えはいつも対立する。

医長は症状を抑えることが精神科医療だという。

根治の考えはない

そうして社会生活を営めないものは隔離すると。

渡辺先生は根治を目指していた。

が、理想は共感するが効きがいまひとつよくないことが渡辺先生の悩みでもあった。

坂田は人格障害を分類しなんとか事件が起きる可能性のある患者を治癒させたかった。

人格障害の治療は今も存在しない。

わずかに渡辺先生の中医理論が理想をいつているがそれも効果が薄いのであれば問題だ。

カウンセリングが行動療法が鬱や神経症に効果的であっても人格障害にはまったく歯が立たない・・

今日の患者のカルテに目を通した。

今日の患者さんは27名

そのうち1名に人格障害の兆候が見られていた。

矢部 弓子 22歳 女性 ビデオ店アルバイト

幼少期よりフェチシズムとみられる執拗かつ自己本位な収集癖がみ

られ、また

普通は興味を示すとは思われない物体にたいし、収集、性的な快感に近い感覚を

覚える

小学5年で好きな男子生徒のフケを収集

数週間後、葉ビンのそこ3ミリたったところ自室で、裸になりそれを体にかけて性的快楽を得ることが初発症状と見られる。

その後高校2年で好きな男子生徒の髪の毛を収集

自宅で卵料理を作り、そこにその髪の毛を裁断し、食べ物にまぜて食べることで快楽を再び得手いる。

高校卒業後、フリーター有的时候に、自分と付き合った男性の精液をコンドームにいれて収集し、合計、性的関係にあった20人ものコンドーム入り精子を冷凍庫に保管。

たまに外に出して溶かして快楽を得ている。

カルテにはまだ続きがあった。

今日来たのは、この矢部弓子が売春防止法で数日前につかまったことから彼女の特異性に注目した警察からの依頼だった。

彼女は街中の風俗街で声をかけた男性がたまたま私服警官だった。

その声をかけたのが、精子を出してこのゴムにいらてほしいと言葉だった。

売春行為はもちろん法律で禁止されており、逮捕されるのもそのほとんどが売春によるお金目的である。

そうだった場合は精神科医に依頼はない。

しかし、その売春婦の特異な行動、奇異な言葉はまれに精神科医につれてこられることが多い。

多くが自分の存在価値をそこにしか見出さない依存症であることが多い。

セックス依存症。

これも最近よくみる病態ではある。

しかし、この矢部弓子の場合は違った。

明らかに男性の精子目的であった。

坂田の思うのは人格障害であるということ。

しかも病的との境目にある境界型であり、その特異性からフェチシズムと一体化している

フェチ性ともいえる病態の人格障害を示していた。

第5章 苦悩

弓子にしてみれば、ただ驚いた。

いつものように声をかけたつもりだったが、それが私服警官だった。

しまった！と思った。

最近我慢をしていた。

彼氏であるあきらはあまり会ってほくれない。

しかも、そんな癖を言ってるわけでもない。

結局弓子は、自分の体と引き換えに男性の精液をもらっていた。

今のところなによりそれが彼女の快樂につながる。

それがなにが悪いのかわからなかった。

当初は警察の取調べでは売春防止法でつかまっただと思った。

たしかにそれはそうなのだが、警察官は動機になにかひっかかりがあつて

それでメンタル的要因を調べたほうがいいと感じ、精神科通院を勧めた。

自分でもこれが治るのだっただと思つた。

しかし病認識はまったくなかった。

自分が病気？そんなわけない。小さいころから変わらない。

小さいころの隣の席の男の子のフケが髪の毛に変わり、精液になっただけ。

それがもしかしてエスカレートしていくのだっただら・・・

何度も考えた。

それで行くことにした。

担当の坂田先生は物静かな先生だった。

一通り全部話した後に、先生は悩んでいるように見えた。

フェチシズムと先生は言った。

そっか、そういう病名？なんだ・

いや、正確には嗜好であって病名じゃない。

フェチ性人格障害と言う症状からくる名称はあってもこれは病気といえるかどうか・

というのは、病名というのは疾病に対してつけられるもので・これはその・疾病とはいえない

現に君は疾病で生活が営めないというわけではないし、これは伝染性も認められないし・

いうなれば、食人族がいたころ、その食人族自体は人を食べていたけど現在の常識からすると人を食べるのは異常であって、昔では問題なかったはずだ・

いわばそういう類のものだから・ただ現在に生きていくには人格障害は治療しないといけないだろうと思うけど・うーん・

という事は、治療法があるの？

いや、今のところはない・ここの病院でも鍼灸なんか使って治療

しているけど効果は今のところでない・・・なんともいえない。

的を得ないことだが、自分が異常ではなく・・・生きてる時代が違う
ということ？

それとも・・・

坂田は弓子が帰った後も考え続けていた。

異常人格は疾病ではないのだから治療する根拠がない。
現に生活を営めないわけではない。

過去に・・・いや未来に想像を絶する人格をもった人たちが現れ、そ
うして生活している社会が存在するのかもしれない。
過去の食人族がいたように。

それは過去のことではない。
未来にもありえることなのだ。

坂田は苦悩した。

ではどうしたらいいのか・・・
自問自答していたが答えは見つからなかった。

病院の窓から、外を見た。

弓子が帰り道歩いている姿が見える・・・

あー、あの子の髪の毛を全部剃ってみたいな・・・

自分の心に表面化したフェチにぞっとした。
ぞっとしながらも、喜びで股間が大きくなっていた。

第6章 退職

あきらはその日の夕方店長に呼ばれた。

たぶん・・・って気はしていた。

なにしろあの後、自分が気になってる女性が入るたびにトイレを清掃中にして中で一時の快楽を楽しんでいたのだ。

いつもトイレが使えないと苦情がきていた。

お店の店員が何人かトイレの外で見張っていたのも知っていた。

それでも出て行くより方法はなかった。

案の定、呼ばれた。

君はトイレを清掃中にして中でなにをやっているのだ？

いえ・・・別に・・・

別にじゃないだろう？おかしいじゃないか・・・

はい。

一体何を考えているんだ？

いえ・・・

このまま同じような事が起こるのであればお客さんからも苦情が来ることだし

やめてもらうことになるよ。

あきらはもうやめてもよかった。

頭の中はいかに合法的に女子トイレに入れるかどうかのことばかり考えていた。

しかも、ただトイレにはいるのでは駄目なのだ。

普段出入りする人を見ることができてそれでトイレも入れるところ・

・
そういうところがないか考えた。

喫茶店・しかも男女トイレは別で、ある程度大きさのあるところ・

・
今度は怪しまれないで自分の嗜好を楽しめなければいけない。

早速、付近の調査にでかけた。

近くにあるファミレス。

学生が多い街だけあって、スーパーの勤務が終わってから行ってみると学生風の男女や

OL風の何組かがご飯を食べたり、話をしたりしていた。

ざっとみて気に入るような女性が4〜5名はいる。

あきらの心は躍った。

ここなら・・

店員になればトイレ清掃で女子トイレにはいるのも容易なはずだ。

明日には今の職場をやめよう。
そう思ったあきららは、家で辞表を書いた。

《一身上の都合により退社させていただきます》

まさにこの通りだと思った。

日本にはいい言葉があるものだ。
一身上でなんでも通じるわけだ。

翌日、スーパーに朝早くいって辞表だけ置いて帰ってこようと思った。
た。

そうすると、朝一番の佐藤さんが来ていた。

こっそり覗くと女子更衣室にはいつていくのが見えた。

後をつけてみた。

そうすると更衣室で佐藤さんしかもっていない、合鍵でロッカーをあけて女性店員の制服にまみれて自慰をしていた。

やっと謎がとけたとあきららは思った。

顔がにやけた。

第7章 佐藤

朝から坂田の病院に担ぎ込まれた患者は精神科に回されてきた救急の処置で警察から回ってきたものだった。

坂田は直接の担当医にはならず医長が担当になったのだが、医療秘書の高木が

先生、人格障害の疑いがあるそうですよ。
しかもフェチ性かもという話です。

そういわれていてもたってもいられなかった。

見にいくと医長がついてとりあえず鎮静剤を注射し落ち着いていた。

先生、どういう所見ですか？

ん？坂田先生・・・おそらくは君の研究してる人格障害なのかもしれない。

というと？

なんでも職場の更衣室で女性の制服にまみれ自慰行為をしているところを警備員に発見され

錯乱してかかってきたという話だ。

医長が注射した鎮静剤は軽微な鎮静剤で精神安定作用がある。麻酔剤と使うこともあるにはあるが麻酔剤を使うと話ができない。
鎮静剤であるから少し話を聞くことができた。

坂田は語調を下げて静かに質問した。

あなたの名前は？

佐藤といいます。

えーと、警備員につかまって取っ組み合いになって警察に通報された。これで間違いないですね？

はい・・・しかし、いつも同じ時間に同じことをしていました。

というと、今回は初めてではないということだね？

はい・・・毎朝10時開店のお店ですが、8時半にはきて9時近くまでそうしていました。

皆がくるのは早くても9時15分過ぎですし、更衣室からは駐車場が見えますのでそれで車が停まればわかります。

今回は誰かが通報したらしいですが、心あたりは？

いや・・・ありません。同じくらいに早く来る人はいません。

いや・・・一人、心あたりがないわけじゃない。

ん？それは誰です？

いや職員のあきらって奴です。

たまに早く来ていた。

しかもそいつは女子トイレにたまに籠ることで店長に怒られていた。
あきら？彼は女子トイレに籠るのですか？

そうです。中でなにをやっているのかさっぱりわからない。

そういう意味ではあなたのやってることも同じだ。変わった事をしている。

私は実は女性の使用下着でお風呂にはいるのが夢なんですよ・・
変わってると思ってくれてもいい。

でも、それが夢だし、それを誰にわかってもらえなくても仕方ない。

いやいや、種類こそ違えど私も同じ・・夢を持って現実にしたいと
思ってるところは一緒ですよ。

え？先生もですか？よかった。同じですね！

いや、完全に同じじゃない
あなたのは現実にするのはかなり法律に触れることになるかもしれない。

ならないかもしれない。

僕の夢は絶対にならないという点では決定的に違う。

先生。ならないって？

ん？いやそういう世の中になればという意味だよ。

じゃあ異常者ではないんですね？

それは精神鑑定をしてからじゃないとわからない・・

坂田はとりあえず長く話すのはこれでやめ、佐藤氏を病室に連れていくように看護師に指示をだした。

坂田は間違いなく人格障害を感じた。

坂田の定義する人格障害とはその事柄以外はまったく正常であり生活を営めなくなるということはあるがなく、しかし人とはまったく違う価値観をもち、特にその価値観次第では反社会性をもつものを特に指していつている。

これであきらも人格障害だとしたら・・こんな近い環境の中に人格障害者が3人もいることになる。

いやもっといるのかもしれない。

しかし、今まで年に数件しか報告されていなかった人格障害は急速に増えていきつつあった。

地域性？ いやそれは否定できる。

土着のものでは決してないし、過去にそういうケースはここでは報告されていない。

遺伝？

それもない。佐藤とあきら、そうして弓子の間には遺伝関係はまったくないはずだ。

しかしどこかでつながっている。

そんな気がしてならなかった。

第8章 カンファレンス

9月11日水曜 精神科カンファレンス

今日は精神科のカンファレンスを行います。

甲高い医長の声が響いてきた。

出席者は医長と渡辺先生、坂田先生、医療秘書の高木もう一人の医療秘書、看護師3名、臨床心理士2名とソーシャルワーカーだった。

一通りの入院患者の現況報告と退院見込み、それと外来患者の報告をそれぞれにしていくな。

そのすべてが終わったところに坂田は手をあげた

ちょっと皆さんのご意見を聞きたいと思いますが発言してよろしいでしょうか？

はい、どうぞ。

最近1週間以内に2ケースの人格障害ともう一人人格障害と疑わしい人物が一人、計3名がこの地域にいるらしいことがわかりました。

従来、ほとんど精神医学界では躁鬱や精神分裂、いわば統合失調症の変形として扱われた解離性人格障害はじめ、かなりのレアなケースでありました、各種の人格障害があいついで見つかっています。

これについて考察したいのですが、人格障害そのものは社会に害を与えたり生活事態がいきずまらない限り措置入院などもできませんし、治療法などは皆無です。

なぜにここの地域に最近頻発しているかご意見のある方いませんか？

渡辺です、えーとですね。これは地域性ではないのですが考えられる可能性があります。

といいますと？

それは気です。

僕の高校の3年のクラスは男子生徒23名中16名が学校の先生、つまり教諭として教壇にたっています。

その隣のクラスでは女子生徒18名中12名がなんと看護師になっています。

つまりはその時代に流行りがあるのです。いやその閉鎖された空間というか限局した部分というか・

この流行はウイルスでも細菌でもないのですが、しいていえば病原菌なき感染です。

同調といいなおしてもいい。

それがこの限局した地域に現れているような気がします。

中医学では氣を呼んでいますますがその氣の伝染ってことがあるのかもしれません。

気ですか？

はい・・・言い換えれば念といえばなんとなくわかりますか？

あ、念ならわかります。

というと、この精神科領域では念が強ければその念は影響を受けてしまう人がでてくると言うわけですか？

そうです。だから誰にうつるかわかりませんし、予測もつきません。

一応これは仮説ですからね・・・

そう念をおして、渡辺先生は席に座った。

坂田は考えた・・・渡辺先生の説はかなり説得力がある・・・ウイルスでも最近でもブリオンでもないなにか伝染性のあるもの・・・気が今回、関係しているということか。
しかしこれはすごいかもしれない。

心の中でそう考えた。

第9章 弓子2

弓子はバイトで疲れた体をベットに横たえた。

こんな時にあれがあったら・・

そうは思うが警察に捕まった時の恐怖を思うと、外に出て集めることもできない。

坂田先生に言われたようにこれは人格の障害なのか？悩んでも結論はでない。

治療法があるならそうしてほしい。

この乾いた心を癒す方法を見つけない。

何度かそう思ったが、精液以外に乾きを潤す方法が見つけれなかった。

暇つぶしにあきらかにメールをいれてみても返信はない。

もとよりあきらからの返信など一度もなかった。

メールはあきらが用事があるときにだけ来るだけで、こっちが用事があってもその返信を

期待しても無駄なことだ。

マンションの室内で買い置きのカップラーメンを食べてテレビを見ていた。

番組ではお笑い芸人がコントのようなものをやっていたが面白いとあまり思ったことはない。

ただこの部屋ではテレビをかけているだけで、弓子の心に語りかけ

てくるものはなかった。

やはり私は人とずれているの？

だからこんなテレビ番組でも面白いと思えないの？

きつとこんなくたらないコントでも大笑いして笑える人生なら悩みもないわよね・きつと。

そう思いながらテレビのスイッチを切った。

吸いかけのタバコが最後の一本だと知ると、近くのコンビニまで行く気になった。

お腹がすいても我慢して買いにいかなくせに、タバコとなると話しは違う。

弓子は近くのコンビニまで行くことにした。

コンビニでタバコを買おうとレジに行った時にレジ横においてあるフリーのアルバイト情報を見つけて一冊手にとった。

それをタバコと一緒に手にもった。

お兄さん！これって無料？

はい、それは無料ですから持って行っていいですよ。

ありがとうー。

明るく返事をした弓子はその情報誌をもって家に帰った。

何度かパラパラめくっているといろいろなアルバイトがあることがわかって新鮮だった。

家政婦、キャバクラ、事務・・・

今のビデオ店の仕事は難しいわけじゃないし慣れてるし楽なんだけどなんか飽きたのかなぁ。

そう思いながら求人を見ていて、ハッと我にかえった。

これだ！

求人広告に載っていたラブホの清掃の仕事。

《ラブホテル ラブラブ 清掃バイト募集》

夜間6時から8時間か、深夜12時から朝8時まで・・・

時給1500円急募

年齢不問 未経験者可

これなら合法的にいや、みつからずに精液入りコンドームを集めることができる。

心は躍った。

第10章 坂田と渡辺

月曜の病院は外来の診察でごったがえしていた。

医療秘書の高木が走り回りながら、投薬券を薬局にもっていったり、受付票の順番を確かめている。

とくに精神科の外来は月曜は混む。

土日は外来が休みなためなのだが、とくに精神疾患の患者は休みの日に心が不安定になる。

今日は休みだと気負いすぎるためかもしれない。

午後3時になりやっと一息つけた坂田は、となりの診察室で渡辺医師の声が聞こえていた。

相変わらず忙しそうだ。

高木くん、これ渡辺先生に渡しておいてくれないかな？

自筆で書いた手紙を渡して、入院患者の回診にでかけた。

夕方、回診を終えた坂田は医局にもどると渡辺はもう医局にもどってきていた。

あ、先生、手紙で書いた話ですが・

はい。

先生はこの一連の人格障害の原因をどうお考えですか？

うーん・・・この間のカンファレンスでお話した内容とほとんど変わ

らないんですが・・

つまりは、気が関係している？

そうです。

もう少しわかりやすく言ってもらえないですか？なにせ西洋医学しか知らないもので中医学はまったく素人で・・

つまりは、人格障害者がある時期、特定の地域に多く存在する理由について知りたいのでしたよね？

はい。

こうは考えられないですか？つまりは、朱に交われば赤くなるという感じですか。普通疾病は遺伝的要因、ウイルスなどの細菌感染、外傷など外の環境によるもの。それ以外にあるとしたら気だと思っているんです。

はい・・

気はある特定の周波数を持つてると考えてみてください。その周波数に同調すると同じような気が発生すると。

同調という奴ですか？

そうですそうです。さすがは坂田先生、西洋医でも物分りが早い。ラジオを考えてみてください。ここにAMラジオをおきます。そうするとラジオから声や音楽が聞こえる。

はい。・・・

じゃラジオを止めて僕がそのラジオのあった場所に行きます。
そうしても僕の口からは音楽は聞こえない。

はい。

同調しないからですよね？

同調したら、声帯もあるんだし音がでるかもしれない・・・でも同調しなければ音はでない。

という事は、同じ地域にいる人は同調してしまっている？

そうそう。そう考えるといいですよ。

同調するということは同じ精神波動をもつと考えていい。
もともと近い周波数の持ち主だったってことです。

で、治療はどうやってするんです？

・・・治療法はないですよ。

え？原因がわかっているのに？

気の周波数を変えるってことは今の西洋の精神医学では不可能ですよ。そういう理論体系がない。

じゃ渡辺先生はそのままほっておけと？

坂田先生・・・もしそっちの方が当たり前の社会だったら？

え？どういう事ですか？

だから、我々のいる現代の常識と違う常識をもつ人たちが生まれてきてるってことです。

過去の時代に人を食べることも当たり前で時代があった。

この時代に食べるのをやめなよ！と声高に叫んだ人がいたとしたら、この人は人格障害とみなされたのかもしれませんが、過去の時代には・・・

ということは、時代が変化しつつあると？

そういう事です、サディスティックやマゾスティックが当たり前で、男と女のセックスも今と違う、傷つけあうことが当たり前だ、常識だという世界が変わっていけばSやMに入らない人は人格障害扱いされることなのです。

先生・・・先生はこの状態をほっておけと？

我々精神科医の役割は、社会の害になる精神患者を隔離したりする権利を持っています。

措置入院という形でね、それは当然お分かりでしょう？

だから問題行動が害になる場合のみですよ。

問題行動があっても害になっていなければ措置入院はできないのです。

あちらから助けを求めてきた場合以外はね。

坂田は立ち上がって窓の外を見た。

とうに夕暮れは終わってあたりは暗かった。

外灯に人の歩く姿が見えていた・・
世界は変わる・・その変革が近いのか・・
坂田は呆然と立ち尽くした。

第11章 あきら3

ご注文がお決まりになりましたらテーブルの上にあるボタンでお知らせください。

はい。

その返事を聞きあきらはニヤリと笑った。
思った通りの声、思った通りの香り。

この上ない自分のタイプの女が二人。

ファミレスで働き始めて2週間目

ようやくあきらも仕事になれ一緒に働く誰にも指導されなくなった。

最初はなれない接客のためにさすがにぎこちなかった。

トイレは玄関からはいって左奥。

あきらの担当はその玄関はいって左側のボックス席を5つ担当した。

もちろん忙しい時はすべてのお客を見なければいけないし、それはバイト同士相互に助け合うシステムだった。

あきらの悩みは好みの女性がトイレにはいったすぐ後にトイレにいけないことだった。

時間がたってしまうとおいも消えどこの個室にはいったのかもわからなくなってしまう。

といってもすぐに入るわけにもいかない。

トイレ掃除は交代制。

みんなが嫌がるトイレの掃除を自らかってでた。

そのためにみんなの評判もよかった。

あきらの掃除の目的は、女性の個室の汚物入れだった。
常に汚物入れを綺麗にしておく。

そうしたら、次の女がはいって汚物入れを使えばすぐにわかる。
1時間に一度の点検掃除の時に汚物入れも確認できる。

あきらの楽しみは汚物入れをそっと開け、中のものを取り出すこと
だった。

使い古したナプキンはまだ温かいくらいの湯気が立ち、経血のお
いをさせていた。

これだ！

あきらは高まる鼓動を抑えるのがやっとだった。

香水のきつい女は生理の確率が高い。

あきらはそう思っていた。

タンポンもたつぷり血がしたたるような奴を見つけると胸が高なっ
た。

やっただぜ！

丁寧にティッシュに何重にもして包み、それをポケットにいれる。

これはさっきの女だ。

さっきの注文した20歳そここの女性はいいにおいをさせていた。

トイレにいったときにトイレのドアを見ていた。

曇り硝子になっているので見えはしないが、手前のドアにはいったかどうかくらいはわかる。

一番手前のドアが開いた。

だからすぐさま、清掃にはいった。

あの女、ナプキンもしながらタンポンまでいれてやがる・・・2日目だな・・・

あきらはバイトが終わるとまっすぐ走るように自分のマンションに帰った。

タンポンを口にいれ、ナプキンを顔にこすりつけながら、股間に手がいった。

ものの10分もしないうちに果てた。

満足感で一杯になったあきらはそのナプキンを壁にはった。

これで30個。

壁には使ったナプキンがびっしりと貼られていた。

それを見るだけで気分は落ち着き、クラシックの音楽でも聴いているかのようにリラックスできた。

もっともっと集めたい。

あきらはもっと集めれる方法を模索しようとしていた。

第12章 弓子3

勤務して一ヶ月

ラブホテルの勤務がなれてきて楽しくもあり、また深夜の仕事が体にこたえてくる時期でもあった。

弓子は最初は徒歩で20分かけてた通勤も、最近は朝は電車に乗ることが多くなってきた。

それだけ歩くには長い距離だったのである。

疲れてくると弓子は妄想が膨らんでくる癖もあった。

電車に乗る時に、いてもたってもいられずにトイレに駆け込んだ。

トイレの個室に入り、今日の収穫の精液入りコンドームを3つほどバックの中から出した。

そうしてスカートをたくし上げ、自分の太もも部分に3つのコンドームを破り精液をつけた。

スカートでちょうど見えない部分に塗りまくり、そのまま外に出た。

まるで麻薬中毒のように恍惚になり、電車のホームに降りていった。

なんて気持ちがいいのだろう・・・

なんて・・・

そう思って立っていると電車に吸い込まれそうになった。

あ、あぶない！！

周辺の人が大声を上げ、ホームに転落しそうになる弓子を押しのけた

弓子は転倒した。
バックの中身はすべて外に出て、膝丈くらいのスカートはめくれあがった。

バックの中にあつた15個ほどの収穫物は全部外に出て、スカートの下の精液まみれの脚は大衆にさらされた。

誰かがそれが精液の入ったコンドームだと知ると、大声を上げた。

キャー！

弓子は脳震盪で気が遠くなる中、その声を聞いた。

誰かが救急車を呼んだのか、救急隊員が来て担架に乗せるところでコンドームに気がついた。

ん？これは・・・

救急車の中で意識を取り戻した弓子は、大丈夫です、もうなんともないです。

いえ。一応、頭を打ったかもしれませんが。
検査だけでもしましょう。

どこかかかりつけの病院はありますか？

・・・じゃ、清和総合病院の坂田先生に・・・

わかりました。とりあえず清和総合病院に連絡をします。
坂田先生は専門診療科目は？

・・・精神科です。

隊員は一瞬戸惑ったが、納得したように返事をした。

じゃ坂田先生に救急連絡しますので、少し休みましょう。
目をつぶっていてくださいね。

15分程度でつくと思いますから。

はい・・・

目をつぶって少し眠れるかと思った。

徹夜明けだった。そう思った瞬間に意識は遠くなった

第13章 診察

2日前に救急で運ばれてきた矢部 弓子は最初こそ錯乱したような感じを受けたが
今は落ち着いていた。

昨日に引き続き今日も外来診療が終わり次第、入院患者の回診だった。

矢部さん、後で診察室に来てもらえないでしょうか？

えーと、1時間後くらいにでも。

はい。わかりました。

矢部の話を再度聞くつもりだった。

昨日聞いた話では、フェチ性が進行してるように見えていた。
しかしその進行具合も基準がないのでわからない。

このまま退院して同じことが繰り返されればやはり治療の必要は間違いない。
違うなくある。

しかしその治療法はまったく見えなかった。

矢部さん、もう一度おっしゃってください、えーとあなたの勤めていたラブホテルでは同じような嗜好の人がまだいたと？

はい・・・話はしていませんからわからないのですが、おそらく・・・

その根拠はなんですか？

いえ・・・勘っていうと怒られるかもしれませんが状況的にっていう話ですけど、二人一組でホテルの部屋の清掃に入るんです。

でも、決まってその人は私をお風呂清掃をするように命じてベット周りはその人がするんです。
でも、いつも使ったコンドームがその人と組むとなくなっているんです。

でも、コンドームを使わない人もいるんだろう？

はい・・・でもそなえつけのコンドームはいつもなくなっていましたから使ってるカップルだと思うのです。

ふーむ・・・じゃ、その人はいくつくらい？
たぶんですけど・・・30歳代の半ばまでいってないのではないのかなと思うんですよ。

坂田は少し沈黙して考えた。
もし事実でしたら、やはりこの街には多すぎる。
こんな比率で人格障害は発生するものなのか・・・数年前なら考えられなかった。

じゃ矢部さんの件にもどうか。

矢部さんはフェチシズムという性癖を持っているのだと思う。

フェチですか？

そうそう。サドやマゾと同じ。

はい・・

で、それ自体は癖なんだけど、性欲と結びついてるだけあってなかなか治せないことなんだ。

はい・・

いや今までは治す必要もなかった、しかし今回のようなことになるのだったら問題だから少し真剣に取り組みしないといけない。

はい、でも治す事が可能ですか？今回のことはみんなにも迷惑かけたので反省はしています

が私自身、治すつもりはないですよ

自分のたったひとつの楽しみなんです。

それを取り上げるのだったら、子供がおもちゃ取り上げられるのと同じことです。

なるほど・・正論だ。しかし事故が起きないようにしなくちゃね。今度そうならないよう、部屋以外でそうになったら、手の第4指のつめのつけねを押すんだ。

え？

これはうちの病院の精神科医で中医師の渡辺先生が言ってたんだけど神経のツボらしい。

なんでもここを押すと正常な神経の興奮にもどるとか・・つまり我に帰るということらしい。

はい・・わかりました。

よろしい。

じゃ明日でも退院できるように事務に手続きしておくから。

はい・・

勤務してたホテルはどうするのか？

ちょっと考えたんですけど、迷惑かけちゃったし、あそこは辞めようかと。

他にもラブホはたくさんありますしね。

他で働きます。

わかった・・

矢部弓子はそういつて、病室にもどっていった。

坂田は考え事してから、電話をとった。

もしもし？ラブホテルラブラブさんですか？

実は週に2回くらいバイトをしたいんですが人手は足りていますか？

あ、はい。じゃ今日これからうかがいます。

久しぶりのどきどきが坂田を襲った。

まるで運動会の前の日の子供のような気分だった

第14章 嫉妬

あきらが勤務して数週間が過ぎた。

思い通りにコレクションもたまりつつあった。

目下のところの悩みは新鮮なものを新鮮なうちに味わえないこと。

以前のスーパ―ならトイレにはいったあとにすぐさま入って、清掃中の札をかけて

自分は個室を堪能することができた。

それができなくなったことはやはりさびしい。

なんとかいい方法はないものだろうか。

ある日きた女性グループ。年齢は20歳代後半くらいの4人。

彼女らがトイレに行った後に、すぐに清掃の時間になった。

1時間に一度しかないが至福の時間。

個室の便座を舐め上げ、汚物入れの使ったナプキンを取り出す。中を見ると経血とともに数本の陰毛がついていた。

彼は血にまみれた陰毛に興奮し我を忘れて自慰をした。

新しい快感だった。

数日が過ぎ、いつもの通りナプキンを集め、自宅に帰った

このときでもはや収集は400枚くらいにはなっていただろう。

新しい新鮮なものしか興味はなく、古くなったものから捨てているから

家にはそんなにはなかった。

それでも20枚程度はそろえていた。

その一枚になんと男性の精液がついたのがあった。
あきらは猛烈に怒りまくり、家中の中のを投げた。

くそお

あいつだ、あの女だ。

彼はちゃんと誰が誰のだからわかっていた。

嫉妬に似た怒りの感情が彼の心に渦巻いていた。

数日間彼はその女性がいってくるのを待った。

夕方になろうかというときに、その彼女は友人と2人で連れ立ってやってきた。

席に二人が座ると、彼は注文をとりに行ってきた。

いらっしやいませ。ご注文は後ほど伺いに参ります。

あら、じゃ珈琲二つでいいわ。

はい・・・

怒りがじわじわとこみ上げてきた。

自分の気に入った女が生理中に中出しさせたことが気に入らなかった。

彼女がトイレにいかうとするときに、いきなりトイレに彼女の後ろから入りこみ彼女の胸倉をつかんだ。

おい！おまえ、生理中に男に中出しさせただろ・・・わかってるんだ！
な、なにを？あんたいったいなんなの？

苦しみながらも彼女はそう言った。

おまえがやったことはわかってるんだ。

このやろう！

大声を上げているのが、トイレの外にまで聞こえ、店長が真っ赤な顔してやってきた。

あきら！なにをやってるんだ！

警察だ！警察を呼んでくれ！店長は大声で叫び、あきらを押さえつけようとした。

つかまれてる女性は泡を吹きながら倒れていった・・・

第15章 措置入院

坂田先生、昨日措置入院で入院された患者さんのカルテを出しておきます。

救急集中治療部から、精神科に転科になりました。

うむ。

高木は事務的に坂田に言った。

坂田がカルテをみて目を丸くしたのは、この患者が以前スーパーで働いていたことで

そこがこの間、診た患者が働いていたところだったことからだ。

あの時そういえば、この患者のことを言っていたのかもしれない。

閉鎖に今は入ってるのか？医長はどう指示したのだ？

医長先生は一応閉鎖に入ってもらってその後、坂田先生に診察指示を仰ぐようにと。

ということは人格障害の疑いなのかな？・・・統合失調なら医長が診るだろうし。

かもしれませんが、私には判断つきません。

そうだったな・・・君は精神科医ではなかったもんな、ちょっと閉鎖に行ってくる。

はい、わかりました。

閉鎖病棟は開放と違って、他の病棟とは隔離されている空間だ。

精神的な病状が重いというより、危害を加えたりする可能性があったり、治療の必要上、他の患者との接触をしないほうがいいと判断した場合に入ることになる。

閉鎖病棟はすべての病室はカメラで監視されている。
もちろん廊下もだ。

病室にはいると、あきらが一人でぼんやり窓を見ていた。

あきら・・・君だね？

はい・・・あなたは？ここの医師ですか？

そうです。名前を坂田といいます。

坂田先生ですか・・・

君は以前、スーパーで働いていたね？

はい。そうですが・・・

やはり君か・・・

なにか？あるんですか？

いやね。ちょっと聞きたいのだけどいい？

はい。

今回ここに入院した理由について、自分ではどうしてなのかわかっているの？

はい。わかっています。

乱暴したからでしょ？

そうそう。それが一番。

でも2番もある。

どういふことですか？

一番の理由だけなら、君は病院に来ることはない。おそらく留置所だ。

でしょうねえ・・・

ここは精神科の閉鎖病棟。・・・つまり社会からは隔離された社会だ。

はい。それはわかります。救急部から転科するときに聞きました。

ここに入るのはそれなりの理由があるし、その治療のためにはいったわけだ。

だから治療には君の協力が必要だ。

そりゃ聞かれたことにはなんでもこたえますよ。

うむ・・・それじゃ今までのいきさつを教えてほしい。なにせこちら

はなんのデータも持ち合わせていないのだからな。

あきらは今までのいきさつをすべて話した。

その上で、自分に治療が本当に必要なのか疑問だとも坂田に言った。

今回はこれだけの事件になった。相手は全治2週間だ。

これは立派な傷害事件なんだよ。

治療の必要がないわけじゃない？

今日のところは疲れただろうからまた明日来るから。

はい・・

坂田は悩んだ。

やはり病認識はまったくくない。

弓子と同じだ。

罪悪感もない。

フェチのニュータイプといえる。

過去のフェチシズムはどういう形にしろ、人と違うという後ろめたさをもちつつ生きていた。

しかし病認識がないところで立派な人格障害といえる。

しかし、統合失調との違いはきわどい。

あきらの場合は、正常生活に及ぼす影響が出始めていることから統合失調の可能性もはらんできていた。

やはり進行している。・・・坂田は確信していた。

第16章 弓子4

あきらに何度かメールはしてみたものの、さっぱり返事がこないのも慣れてはいたものの

ここ一ヶ月もこないのは不思議には思ってみたものの、家まで行く気にもなれずにた。

前のバイトを辞めてしまったので早急に探す必要もあったのだが、自分の嗜好と合致する場所はやはりラブホしかないかなと考えていた。

坂田先生のいうように、少し治すように努力したほうがいいのだろうかとも思ったが数分後には自分が精液入りのコンドームにまみれているのを想像して早く探さないといけない気分になった。

近くのコンビニで買ってきていたアルバイト情報誌を見ながら、またラブホを見つけた。

やはりラブホで働きたいと強く思うようになっていた。

やはりラブホはバイトとしては待遇がよかった。

普通の人は働きたくないのかな？

少し考えたが、なぜかはわからなかった。

人の情事の後の掃除はものすごい楽しかった。

こんな楽しい仕事があるなんてわからなかった。

使ったベットのシーツの変色した色を見て、あれこれ想像した。

黄色く変色した尿の色。

このベットでした女性はしながらおしっこを漏らしたに違いない。

またちゃんと拭いてあるものの、色が茶に変色したものは浣腸プレイとしたんじゃないかと

想像して顔がにやけた。

部屋についてる大人のおもちゃの自動販売機をみてなにが売れたかを点検し補充する。

こんな大きなバイブが？と思われるようなものも売れていた。

弓子個人ではなにか道具を使って自慰行為をすることは考えたことがなかった。

今まで道具といえば精液のみだった。

だから道具には免疫があまりなかった。

かといって、そんなものを使う気にもなれなかった。

弓子はあっさりと次のバイト先を決め、そこに面接を受けにいつてすぐに働いてほしいと言われその日のうちにバイトにはいった。

働いている人は40歳代の年齢の女性が4人ほど。

それで全40室のラブホテルの清掃をする。

今度のホテルは一人で一室掃除することになっていて、最初のころは二人で回らせてくれたが

すぐに経験者だとすると一人で一室もたされることになった。

やはり部屋にはいつてすぐに飛びつくのはベット脇のゴミ箱。

中をあさって、コンドームを探す。

見つけたコンドームを掃除用エプロンのポケットにいれ部屋の清掃

にかかる。

シーツのおいを何度か嗅ぎながら、新しいシーツと替える。
それだけに恍惚になっていった。

弓子の性は倒錯していった。

第17章 坂田

坂田がバイトに出て2週間が過ぎた。

元々学生時代に少しアルバイトしただけで、医療の道にはいつてからは医師以外のなんの仕事もしたことがない坂田にとってはこのホテルの清掃は新鮮に感じられた。

この2週間、仕事をまず覚えることに専念した

そもそも人格障害の調査をしたいつもりだった。

弓子の言った言葉・もう一人ホテルの従業員にいたという話。

それと自分でもなにかそういう仕事をしてみたかったという願望もあった。

坂田には学生時代に恋人といえる女性はいた。

双方とも一人暮らしだったために、こういうところとは縁がなかった。

結局一度もラブホテルには行かずに、その恋愛は終わった。

以降は恋愛らしき恋に発展することにはあったが、プラトニック以上にはなかなか進まなかった。

ホテルの室内のたったいま情事が終わった室内は妙に坂田を興奮させるものがあった。

ホテルは廊下や玄関にはカメラがついているのである程度年齢や、背格好は確認することができる。

しかしそれ以上のカメラの精度はなく、顔がはっきりわかる程度のものではなかった。

どんな人がどんな風にどんな事をするのか・・

坂田の興味は尽きなかった。

まだ2週間くらいしかたっていなかったが、一人で部屋を任されることも多くなってきた。
ゴミ箱をあさる。

ティッシュの山とゴム。

時折、生理で使った衛生用品の類、媚薬の薬瓶なども出てくる。

坂田はそれを自分のポケットにティッシュで包み持ち帰った。

あくまでフェチの研究のためと納得させていた。

ホテルの室内清掃は12時でピークを向かえる
その後は宿泊に切り替わるために、当面室内清掃の仕事は出てこない。

休憩の時間が回転が早く、一部屋で2回転3回転することもあった。

12時過ぎに坂田のバイトの時間を終えて、車にもどった。
一台の車がホテルからでたところだった。

坂田は自分の車のエンジンをかけてその車を追った。
白塗りのベント。

そのベントを20分もつけていたら、女性だけが降りて目の前のマンションにはいった。

坂田はエレベーターがどこに止まるか確認し、外に出て電気のつく部屋を確認した。

4階にエレベーターはとまり、4階の端の部屋の明かりがついた。
あ、ここだ・・

彼女がどんな私生活をおくっているのかどんな仕事をしているのか、どんな性格でどんな生き方なのか。

興味は尽きなかった。

なんとか4階のベランダに上がれないものか・・
横の電柱を使って4階の端にはいけそうな気がした。

なんとか電柱に上がり、4階のベランダに降り立ち、窓の隙間から彼女の姿を確認することができた。

見ると、着ている洋服を全部脱ぎ捨て、全裸で生活をしているようだった。

目を疑った。

窓を蹴破って中に入りたくなる衝動をなんとか押さえ、自分で果てた。

坂田もまた弓子たちと同じように進行しつつあった。

第18章 退院

あきらが入院してから2週間

そろそろ退院させてもいいのではないかという話がでてきた。

もちろん退院させてすぐさま自宅というわけにはいかない
警察とも話をしなければいけないのだが、精神疾患であるという事
であれば刑法では
罪に問われない。

坂田は診察室にあきらを呼ぶように秘書の高木に言った。

あきら君を呼んでくれないだろうか。

はい、わかりました。

先生、時間は何時に？

いや、今すぐでいい。

週中の夕方外来もほぼ終わった時刻になる。

一般外来が終わった、診察室は病院スタッフしかないさびしい空
間になる。

あきらは、少し上気した顔で診察室にはいつてきた。

ここの生活はどうだい？

はい・・・まあ、なれるというものではないでしょう？でも不自由は
してるわけじゃありません。

そっか。そろそろ社会復帰も考えたほうがいいと思うのだけど君自身はどう？

一刻も早く出たいですよ。入院なんて嫌です。どこも悪くないのに・

君のやった事はどう考えているの？

もちろん傷害に発展するなんて思っても見なかった。ただ怒りが収まらなかったんですから・

そうだね。で、また同じことが起こったら？

今度は理性でカバーできると思います。

うむ・・そう。人間は欲求と理性とのバランスで成り立っているんだ。

その理性部分が怒りで飛んでしまうと欲求衝動を抑えることが不可能になってくる。

それが今回の事件につながったこと。

それともうひとつ

はい

君の特異な収集癖だよ。

その収集癖は異質だし、欲求と直結しているものだからよほどの理性が必要なのだと思う。

これは犯罪者すべてにいえることだ。

その収集癖についてはなにか言いたいことはある？

僕にとって女性のナプキンなどは他の人の切手収集やコレクションと変わりません。

根本的には一緒なんだと思ってます。

でも退院するからには抑えるようにします。

それじゃ、今度の会議で退院を提案してみよう

ありがとうございます。

あきらの心にはその収集が悪いことだとおもってはいなかった。事件を起こしたことは悪かったかもしれない。

でも、事件さえいや、事件にならなきゃいいんだ。

そういう思いが強く心に芽生えた。

そういや弓子はどうしてるだろう。

僕が入院したことなど知ってるのだろうか。

診察室から見る窓の外は子供がサッカー遊びをしていた横に立って見ている母親は妊娠しているようだった。

それがただ気になって坂田先生の話は途中から頭に入らなくなっていた。

第19章 バーテン

あきらが退院して数日が過ぎた。

とりあえず仕事をしなければ食べていくことも考えないといけない。

以前の職場にはもどれないだろうし、今度はなにをしようかと考えていた。

元々お酒を飲まないあきらは誰かに連れられて飲み屋にいったことはあっても、一人で行ったことはなかった。

ビールもおいしいと思ったことはない。

飲めないわけではないのだ。

ただ愛想が良いわけでもないので接客はそもそも好きではなかった。た。

どうしても顔に出してしまう。

あまり愛想が悪くてもできる飲み屋はないか考えていた。

外を歩こうと思った。

もう外は真っ暗だった。

JRを使って飲み屋街にまで行った。

数分歩くとバーテン見習い募集の貼紙を見つけてそこにはいったみた。

暗い店内には女性客数人とカウンターにはお客が一人。

あのー外の貼紙を見たんですが・・

あゝ君できるの？バーテン

経験はまったくないんですけど、勉強はします。

ふゝん・まあ、ルックスもよさそうだし、働いてみる？

夜の仕事はわりと簡単に決まるものだった。

ちょっとカウンターに入ってみて。

そう、40台後半のマスターに言われてカウンターに立ち、マスターは外からそれを眺めた。

うん。いいね。背もちょうどいいし、絵になるし。

ありがとうございます。

いつから働けるの？

もう、今からでも。

んじゃ、今日はまずはバーテンよりウェイターにでもなってもらうかな。

あきらは裏に通され、着替えをもらうと早速、ウェイターになって働いてみた。

客の注文をとる。

それを伝票に書いてカウンターに持っていく。

カクテルの名前を覚えるのが大変そうだけど、なんとかなるだろう
と思っていた。

マスター、こここのトイレは？男女別？

トイレ？

玄関の横のところ。トイレは男女一緒だからわかれてないから。

そっか。それは好都合だ。

内心そう思っていた。

第20章 医局

日中の外来診療も終わり、入院患者の回診も終わり医局で帰りの支度をしようとする。

自分のデスクに座っていた。

ここの病院は医師数もそんなに多くないため、医局にすべての科の医師が机を並べている。

中央に応接セットが置いてあり、そこに時折居眠りして長いすに横になってる医師もいれば、テレビに興じている医師もいる。

医長クラスになると別室になる。

部屋は続いているが、囲いがあって、そこには医長クラスが少し大きめの机を何台か並べていた。

副院長や院長になると完全に別室になる。

同じ精神科の渡辺と坂田は長いすに腰掛けてテレビをつけた。

渡辺が入れた珈琲をもらって坂田も飲んでいた。

テレビはコメディアンのコントから、ニュースに変わっていた。

では、本日のニュースです。

昨日、起きました殺人事件のニュースです。

この殺人事件は妊婦が、下半身を鋭利なもので引き裂かれ、胎児を取り出すというまれにみる残虐な手口で、精神異常者ではないかと

いう疑いや、この被害者に個人的に大きな恨みをもつものの犯行ではないかという見方の二面から捜査を開始しております。

被害者は24歳の妊婦で妊娠八ヶ月になろうとしていたところで病院の帰りに喫茶店によってその後消息はわからなくなっています。

坂田先生、この犯人は精神異常だろうか。

うーむ・・・怨恨か精神異常だろうけど、でも精神異常だとすると胎児を取り出すなんて事は

普通は考えられないから、人格障害だろうけど・・・

怨恨だとすると、被害者の女性の妊娠にかなり怒りを覚えて？だとしてもこの殺し方は普通じゃない。

人間技じゃないよ。

坂田はこの間のあきらが、窓の外の妊婦を見ていた姿を思い出した。まさか・・・な・・・

渡辺先生はこの間、気が感染力をもつようなお話をしてくれましたね？

うん、そうだね、しました。

それは感染したと仮定してその人の中で増大化すること、つまりはウイルスが進化するような事があるとお考えでしょうか？

うーん・・・難しい質問ですね。でもありえると思いますよ。

たとえば、癌になるとしますね。気の影響で。

癌が気の影響でなるかどうかはわからないけど、癌は確実に体内で成長していくわけです。

気も増殖していくと思っていいますよ。

そのうち脳細胞までおかしくなる。

とすると、この間僕が話した、人格障害は次第にどうなるの？

人格障害はそのうち統合失調になるでしょう。

自己統制がとれなくなる。

正しいことと間違っていることのバランスがおかしくなるんですよ。体は正しい気が100としますよね？

そのうち感染した気が20くらいだったら、まだ80の正しい気があるので押さえ込めることは可能かもしれません。

しかし、それが50を超えると正しい気が逆に押さえ込まれます。

邪気が勝つんですか？

そうです。

殺人事件の犯人はほぼこのパターンでしょうね。

先生はなぜこのことを精神医学学会に発表しないのですか？

状況証拠と仮定だからですよ。気の証明が中国でもできていない。

でも、精神医学なんて、そもそも状況証拠だけでしょう？脳科学もまだまだ進歩はしていない。哲学で充分議論できる範疇でしょう？

その議論が面倒なんですよ。おそらく議論になってもディベートで

きない。証明できないからです。

そうなんですか・・

坂田はなんとか証明できないのか、そうしたら誰かが治療法を解決できるかもしれない。

そう思いながら席を立った。

お先に・・

そう言って医局を出た。

もしや自分の中にも？ いやいや、そんな事はない・・
何度も自分の中のなにかを否定し歩いていた。

第21章 食事

弓子はホテルの仕事を再開してからやっと気持ち的には落ち着いてきていた。

適度な仕事、納得がいくだけの精液の回収

それが弓子の気持ちを安定させることができた。

気持ちの安定のためにいまやもう、男の精液はなくてはならないものになりつつあった。

いろいろな精液を味わっているうちに様々な味がすることに気がついた。

辛い味、しょっぱい味、甘い味、ミートソースのような味、薬のよ
うな味・

その味を味わうことで弓子は放出した男がどんな生活をしているか想像しながら悦にはいっていった。

辛い味は、食べたものであればカレー、インド料理など。

もしかしたらすごいストレスでなにか体内から分泌されたのかもしれない。

いつの日か血が混じっていることもあった。

そんな時はもっと興奮した。

実際は膀胱炎だったりしたのかもしれない。

しかし弓子はそういうレアなものを発見する喜びを感じていた。

弓子の勤務したホテルはカメラがついていた。
もちろん室内ではなく玄関や廊下。

男の顔を実際に確認し、その精液を採ることが生きがいになっていた。
った。

家の冷蔵庫にはどんどんストックがたまった。

ある日はパンにジャム代わりにつけて食べた。

ある日は珈琲にクリープ代わりに入れて飲んだ。

ある日はお米にいれて、炊き込みご飯を作った。
それを誰かに食べさせたかった。

ホテルの勤務してる人たちとはあまり交流もなかったが、同じ年齢
の女性がいてその女性を
家と呼んだ。

彼女もあまり友人がいなかったのか、喜んで家に遊びにきた。

彼女にご飯を作ってあげたが、精液入りのご飯や、味噌汁をおいし
いと言って食べた。

それを見て興奮してしかたなかった。

こんな楽しみもあったんだ。

弓子は嬉しかった。

新しい快感を見つけた。

第22章 同調

あきらが働くようになって女性のお客さんが増えたようだった。やはり若い男性がいるとこないのとは違った。

あきらはトイレ掃除をかってでた。

それがあきらには好都合だったのだが、お店もトイレ掃除を率先してやってくれる

人がいることは嬉しいことだった。

もちろんあきらには目的があつたのだが。

この間妊婦の女性の後をつけた。

そのうち自分でもなにをしているのかわからなくなってしまった。

気がついたら家にいた。

手が真っ赤になっていた。

舐めると血の味がした。

ナプキンについた血くらいでこんなに両手につくはずもない。

なぜだか自分ではわからなかった。

時折、最近は自分が自分じゃないような気がすることもあった。

そんなに頻繁ではなかったのだが、そういう気分になる日も出てきていた。

自分ではなんだかわからない。

それが謎だった。

坂田先生に気の同調が起こるという話を聞いた。
気とはなんなのかわからなかったが、簡単にいうと脳波に近いものが人にはあって

その脳波が同じ周波数になると同調現象が起きるといわれた。

同調とはラジオのチューニングを同じことだ。

みんな微妙にその脳波みたいな気の周波数は違うのだ。

それが同じになるとき、気の同調がおきるという説明だった。

あきらはカウンターの中でぼんやり考えていた。

あきら！水割り作ってってさっき言ったじゃん！

常連の年配の女性のお客が言った。

はい！すいません、今持って行きます！

今日はあまり若い人がいなかった。

この年配の方が10名以上で貸しきっているからだった。

さつきから水割りを何杯作ったことか・・・

そう思っているとまた気が遠くなってきた。

誰かの意識がはいってきてるようだった。

頭の中にホテルの映像が見えた。

あきらはそのホテルで清掃をしているようだった・・・

第23章 同調2

坂田は仮説を立てていた。

気が電波みたいなもので、それに同調することで人格障害者が多い地域があるのであれば

離れていてもぴったり一致する脳波、もしくは気の周波数で同調が起こりえるのではないか？

こんな仮説である。

渡辺医師が言っていた、話からヒントを得て考えていた。

同調が起こると意識の共有が起こることもあるのではないか。

古くはテレパシーなんて言っていたものもあった。

遠く離れている人に念を起こることを言ったのだが、たまたま偶然にそれが起きたとすると。

仮説は仮説でしかないが、そんな可能性を考えることがあった。

坂田はこの間も酒場の画像が頭に入ってきたような気がした。

その前はもっと恐ろしい夢を見たような気がした。

酒場の画像は何人かが、お酒を飲んでいて、注文を受けるようなそんな感じだった。

それを断続的に受け取った。

誰かの目を通して自分の頭に入ってきたと言ってもいいくらいのものだった。

精神科医としてすべては科学的でなければいけないと考えたことはなかったが、この事実に関していえばあまりにも非科学的だった。

しかし事実が事実だ。

誰かの意識が入ってきたと考えることのほうが自然だった。

同調が人為的にできるとすると・・・

坂田はあまりにも突飛な発想をした。

坂田は家を出て病院に向かった。

人格障害として診ている患者のデータをみたかった。

今までに見た夢とその患者はどこか一致してるところはないか、どこかで同調が起こった可能性はないか考えたかった。

医局にはまだ渡辺がいた。

先生、少しお話を聞いてもらいたいのですが・・・

なんでしょう？

気の同調の話ですが、誰かの意識が他人の意識に混入することって気の話で説明がつかいますか？

うーん・・・考えられないことはないですが・・・

前例はありますか？

前例って・・・といつかね、先生、たとえば様々な宗教で誰かがついでるとか、なくなった人でなくても後ろに生霊がいるとかいうのを聞いたことはありませんか？

あ、ありますね。

それは僕は気をそうやって表現しているのではないかと思ってるんですよ。

はい。

つまり気とは意識であり、意識は強いものであれば亡くなってからも存在しそれが誰かの体内にはいるとそれが憑かれたというように言ってるのではないかと。

・・・

また生きてる人の念が強ければそれは生霊と呼ぶのではないかと思ってるんです。

わかりました・・・つまりは過去からずっとそういう形で気と同調を説明してきたという話なんですね？

そうです。

もしかしたら・・・

そう思うとあきらの顔が浮かんだ。

第24章 帰宅時

弓子はホテルのバイトのときは朝帰りになることが多い。

以前のバイト先は自宅から徒歩でも行けたくらい近かったのだが、今度は電車を乗り継ぎしていかなければいけない。

朝8時前のJRの駅はもうすでにこれから通勤する人たちが多かった。

サラリーマン、OL・・

自分もあの中にはいっていく人生もあったんだろうなと思いながら、これから家に帰る自分と対比した。

うらやましくなかった。

それだけ自分の生き方との違いを明確していた。

日ごろ人に気を使う生き方をしたいとはおもわない。

自由に好きな用に自分の時間を使っていきたい。
それが彼女の望みだった。

ホームに立つと後ろには女子高生と思しき集団が集まっていた
6名くらいもなろうか。

流行のデザイナーの制服を着ているところを見るとおそらくは私立校なのだろう。

この沿線には高校は何校もあった。

女子高生のころは楽しかったのかなあー

自分を振り返ってみてもあまり思い出もなかった。
楽しい思い出といえば、好きな人の髪の毛を集めたり、料理にいれ
たり。

そんな事ばかり思い出された。

電車に乗り込み、女子高生の集団の横に立った。

相変わらず、大きな声で笑いながら、楽しそうに話すその子たちに、
嫉妬に似た感情を覚えた。

ポケットから今日の収穫物である精子入りのコンドームを2個取り
出した。

昨日から今日にかけての収穫は4つだった。

組んで掃除をする人の目を盗んでコンドームを収集するのはなかなか
難しい。

お風呂掃除にはいってくれるといいのだが、昨日のおばさんはお話
が好きだった。

どこに行くにも一緒に行動しようとするために、目を盗むのが大変
だった。

ここのところそのおばさんと組むことが多いのでいたし方なかった。

その精子入りのコンドームを指で穴をあけて、女子高生のスカート
にたらした。

誰のものともわからない、精子をスカートにたっぷり押し付けつけ
た。

そのまま弓子はその女子高生から後ろに下がり少し遠ざかった。

なに？ あんたのスカートになんかついてる？

え？なに？

きゃー精子じゃない？

きゃー！！

大声でわめき散らす集団を見て、おかしくて笑い転げそうだった。
楽しかった。
久しぶりに大声で笑いたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3485b/>

フェチ性人格障害

2010年10月8日22時33分発行